講演要旨

ロボットとからくり―科学と芸能の狭間を生きた田中久重―

山　田　和　人

人型ロボットが日本で普及する要因のひとつとして人形、もしくはからくり人形の存在があげられます。社会に受け入れられるためには文化的な素地がなければなりません。田中久重の「弓曳き童子」の映像と竹田からくりの弓曳きからくりを紹介しながら、ロボット技術の精神的基盤としてのからくり文化の裾野の拡がりについて考えます。この人形は有名なからくり人形であり、自然科学史の分野の鈴木一義の研究が詳しい。今回は、それをからくり文化研究の側から位置づけ直します。

実は、田中久重は、東芝の創業者であり、近代科学の黎明期に活躍した技術者であり、田中近江大掾として嵯峨御所から受領を赦されたからくり師であり、一座を束ねる座本の役割を担ってもいました。その意味で、田中久重は科学と芸能の狭間をたくましく生き抜いた先人のひとりでした。いや、科学や芸能といった近代的な腑分けではとらえられない日本の技術の想像力を体現した人物でした。

からくり師田中近江大掾のからくりの記録としては、巻子本と番付が知られています。巻子本は、従来着想を記したアイデア帳という位置づけがなされていたようですが、実は、興行を前提に書かれたものであり、上演の順番に演目を記したものであることが明らかになりました。なお、実際の興行の実情は、番付などで詳細を知ることができます。

田中久重の弓曳き童子、文字書き、万年時計などに、竹田からくりの命脈を引き継ぐからくり師としての着想が豊かに示されています。時間があれば近年安城市で発見された文字書き（曲書き）の座敷からくりにも触れます。

こうした文献資料の公開・共有によって、田中久重や竹田からくりなどを学際的、多元的に評価できるようになるかもしれません。人型ロボットの技術の本質やロボットを受け入れる日本人の感性に迫ることができるかもしれません。

山田和人（やまだ かずひと）　　同志社大学文学部　教授

【専　　門】日本近世文学・芸能

【主な業績】

- 「竹田からくり関連の絵画資料」『国語と国文学』911号、1999年
- 『古浄瑠璃の研究と資料』和泉書院、2000年
- 「田中近江大掾のからくり―芸能と科学の狭間」『同志社国文学』61号、2004年
- 「からくり人形と絵画資料」『藝能史研究』190号、2010年
- 「竹田からくりの演目と分類」『西鶴と浮世草子』（５）笠間書院、2011年

【最近の研究】

大津曳山祭総合調査報告書2015